



する「モノ」(商品)の中には流行する、世の中のブームになるという現象を生み出すものがあります。そのブームがどのように作られるのかを知つておくことは、皆さんにとっても大変役に立つことと思われます。モノが動いていく(売られていく)過程には二つの方向があります。そのひとつはモノ自体を面白いものであるとか、貴重なものであるとか、モノそのものの魅力を戦略的に煽つて購買欲を刺激する方向です。もうひとつは、何らかのきっかけでブレイクしたものがたまたま供給できていったますます価値が高まつていくというものです。昨年「たまごっち」ブームが巻き起こりましたが、あの過熱ぶりにもウラ話がありまして、あの「たまごっち」 자체、実は中国で生産しているのです。これは一九

# ノはステキだ!! —こだわりの人生—

十六期E組 塚井一雄



坪井一雄

だ!!

の人生――

の時点ですで、大量生産のラインを作ろうとしてもそれには莫大な設備投資が必要となります。これは（あればあるほど）もっと売れたであろうに、ある意味で後悔が残った自然発生的生産数を限定して、例えば一万個のみというやり方もあります。生産の余力はあるが、あえて少なめに設定し購買欲を煽る、という方法です。そのために、スペシャル・ヴァージョンやメモリアルな要素を加味する努力というものが必要になってしまいます。このようにブームはなぜ起きたのか、その構造を考えてみると、うことはとても興味深いと思います。

モノの見方ということについては様々なことがあります。まずモノを道具として見るか、また、楽しみとして見るかによって見方も全く違ってきます。道具としてみた場合、鉛筆削りはシャープペンなら字が書ければよいということになりますが、楽しみとしてみると、というのは単に機能だけではなく、それをを持つことによつて仲間と共通の言語で話すことができる、ある種コニケーション手段として

の性格づけができるものと思われます。また、モノの価値には絶対的価値と創造的価値の二種類があります。イヤなどの社会における経済的基盤に基づくものですが、絶対的価値とは世界共通で普遍的な価値であり、お金、金（ゴールド）、ダービーなどの社会における経済的基盤に基づくものですが、創造的価値とは、人によつて価値の意味づけが変わつてくる、広くは美術・芸術に通じるもので、そこには必ず創造性が存在し、それを作った人、買った人が、皆さんも自分が気に入ったものに対して「そんなモノに価値があるのか」と問われたときには、創造的価値のことにつれて少し反駁をしてみてもよろしいのではないかと思います。

私は現在、通信販売を主体にしたTV番組に出演しておりますが、ある基準を持っておりますが、あるモノを紹介しております。それは本当にいいモノであった場合は『いいですね』とか『私も欲しいです』と言い、局サイドのビジネス上あまり感心しないものが登場した場合には『この商品はこれこれの歴史があり…』とか『これは何々の素材で出来ています』と、商品自体を否定することなくコメントをするようにしています。機会があればご覧頂けたらそのあたりをチェックしてみると面白いでしょう。またそんな関係から、以前、早稲田大学人間工学部の吉村作治教授よりコンタクトを受けたことがあります。ご承認の通りエジプト考古学の研究をされている教授の方が、どちらかと言うと時代の最先端を追つておられる方の研究になぜ興味をもたれたのか不思議でしたが、お会いして話を聞きするとなるほどな、と思いました。

## 山に登る

色川秀男

下通信工業で、そんなマイスターに出会いました。その人は通称アンテナ博士と呼ばれる春木さんという社員の方でした。春木さんはアンテナ技術の世界では画期的な特許の数々を取得されている権威ですが、アンテナのこと以外は全く無頓着なところが逆に強烈な印象を残しました。彼らのような人物に出会うと、真剣にモノ作りをしている現場の一端に触れたという実感が湧いてきます。

私が十六年前にスタートさせた新製品情報誌「モノ・マガジン」では、世界中がその取材対象となっていましたが、自分やスタッフたちにとつても本当に面白い経験をしてきたと思えます。中でも取材中のハブニングこそが、辛くもありましたがその楽しさを感じさせてくれるものでした。同時に各国を取材して回つて得たことのひとつに、見た目だけの経験値では決して判断

してはいけないということがあります。情報として発信するためにはそこに必ず検証するという作業が必要となってきます。マスコミに携わる人間の姿勢として、そのプラスマイナスを与える影響力というものをたえず認識することです。今では「モノ・マガジン」のメディアとしての影響力も、予測をはるかに越えるものがあると感じています。これまでスウォッチを始め、ジッポーやフライトイジャケットなど様々なブームを生み出してきました。それらの全てにはある共通したキーワードが存在しています。それは『記号』です。モノには必ず記号が隠されているのです。そのモノがいつ、どこで作られたのか等々が記号で記されていて、これが今のコレクション。ブームを形作る要素のひとつになっています。気にしない人たちにとってそれはきっとあるはずなのです。ノの見方あるいは世の中の見方ちょっとと角度を変えてみたら新しい発見があるのです。一度考えてみるのです。」

それが自分なりのモノとのかかわり方を見つけたということなのです。

一期生と同齡  
—退職にあたり—

教諭 佐藤 正

まずもって駒沢大学高等學校第四十八期卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。私もこの度、皆さんと共に定年退職で学校を去ることになりました。

思えば昭和三十六年四月以来、三十七年間の永い教職生活でありました。その間、教職員の方々はもとより、多くの在校生との関りの中で、自分の成長を助けられてきたよう思います。また、卒業生の諸君からも、さまざまな形で励まされ、楽しませてもらいました。

駒大高校という一つの教育機関を媒体として、三年間で卒業する生徒諸君と、

は、私は異なり、首都東京という戦争被災地での学校生活で、さらに大変なご苦労をされたと思います。充分な食糧も教科書もなかった時代ですから。そんな時代の駒大高校の開校と一期生の誕生は、まさに新しい時代に向けての大きなか期待と希望を担つたものとなつたのではないでしょうが。

私が渋谷校舎時代に採用された最後の教員ですが、当時はまだ十四年目を迎え学校にしては校舎も施設も貧弱なものでした。しかし一期生が私と同齡であるということに、少なからぬ因縁と愛着を感じております。すでに卒業された一期生に代わって、同齡として何か後輩達に代弁できることがあるのではないか、それは又うつむく、母交

# 一期生と同齡

教諭佐

正

A black and white portrait photograph of a middle-aged man with dark hair, wearing a dark suit jacket, a light-colored shirt, and a patterned tie. He is looking directly at the camera with a neutral expression.

佐藤 正

まずもって駒沢大学高等学校第四十八期卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。私もこの度、皆さんと共に定年退職で学校を去ることになりました。

思えば昭和三十六年四月以来、三十七年間の永い教職生活ありました。その間、教職員の方々はもとより、多くの在校生との関りの中で、自分の成長を助けられてきたよう思います。また、卒業生の諸君からも、さまざまな形で励まされ、楽しませてもらいました。

駒大高校という一つの教育機関を媒体として、三年間で卒業する生徒諸君と、三十七年間で退職する私は、年数の違いはあっても、同じ学舎で学び相互に自分を高めてきたという点において、何ら異なることはありません。そんな中で、ただ意識の中に強く感じていたことは、私が丁度本校の一期生と同齢であるということでした。

昭和二十三年開校といたと、私も信州で高校一年に入り、多感な青春の時を送っていました。卒業後も東京には向かわず、名古屋に行き、駒大高校とは結びつきようもない距離にいました。その後ご縁により勤務することになったのです。

私の同年代は、戦中戦後にかけて中等教育を受けた訳で、統制国家の中での教育と、敗戦直後の教育行政の混迷の時代を過ごしました。ましてや本校の一期生

は、私が渋谷校舎時代に採用された最後の教員ですが、当時はまだ十四年目を迎える校舎にしては校舎も施設も貧弱なものでした。しかし一期生が私と同齢であるということに、少なからぬ因縁と愛着を感じております。すでに卒業された一期生に代わって、同齢として何か後輩達に交代できることがあるのではないか、それは取りも直さず、母校の発展を願う気持を伝えることにはならないと思いました。そして一期生達の活動に引けをとらないよう、同齢として歩む自分自身を励ましてきたように思います。

ここに開校五十周年を迎え、男女共学制として初の女子卒業生の誕生をも時を一にし、この記念すべき年の巡り合わせに退職できる自分を大変幸せに感じております。

駒大高校の歴史が半世紀を過ぎ、学校としての真価を問われる時代、卒業生としての真価を問われる時代になりました。同窓諸先輩はもとより、在校生も自分の名前を大切にし、また母校の名を大切にして、社会の有為の人材として益々ご活躍されるよう願つて退職のご挨拶と致します。

は、私は異なり、首都東京という戦争被災地での学校生活で、さらに大変なご苦労をされたと思います。

充分な食糧も教科書もなかった時代ですから。そんな時代の駒大高校の開校と一期生の誕生は、まさに新しい時代に向っての大きな期待と希望を担つたものとなつたのではないかと

か。

私が渋谷校舎時代に採用された最後の教員ですが、当時はまだ十四年目を迎える校舎にしては校舎も施設も貧弱なものでした。しかし一期生が私と同齢であるということに、少なからぬ因縁と愛着を感じております。すでに卒業された一期生に代わって、同齢として何か後輩達に交代できることがあるのではないか、それは取りも直さず、母校の発展を願う気持を伝えることにはならないと思いました。そして一期生達の活動に引けをとらないよう、同齢として歩む自分自身を励ましてきたように思います。

ここに開校五十周年を迎え、男女共学制として初の女子卒業生の誕生をも時を一にし、この記念すべき年の巡り合わせに退職できる自分を大変幸せに感じております。

駒大高校の歴史が半世紀を過ぎ、学校としての真価を問われる時代、卒業生としての真価を問われる時代になりました。同窓諸先輩はもとより、在校生も自分の名前を大切にし、また母校の名を大切にして、社会の有為の人材として益々ご活躍されるよう願つて退職のご挨拶と致します。

# 町議会に参画して

十三期じ組

赤羽公彦



で真の我々の進むべきを学び町政に反映中。地方分権化に対応すべく地方自治体の在り方を学び町政に反映努力中。現在総務文教部委員会を委され未来を担う子供達への種々の教育の在るべき姿に真剣な議論をすることが、元町議で我事務長無投票阻止で出馬! 仲間の出馬!! が、周りの方々の御努力で二位当選、責任の大さ益々痛感。

二期六年半の主活動、一

九九年四月二十六日行財

政改革先進地ニュージーラン

ドのワイトモ(土蚕で有)

名)と蚕の辰野との姉妹都

市提携に向け奔走、実現。

月二十一世紀ビジネス協議

会に参加、二十一世紀の日

本の在るべき姿を学ぶ。個

を冷厳に見つめ地球的規模

としてその可能性を引き出

すことこそ大切の持論展開

育の弊害を訴え、一人一人

の持ち物に光を当てる事、

そして熱ある教育を。又、

ボランティア連絡協議会の

長として三十一団体の調整

自然体の扶助心の大切さを

orボランティアの実体験、

塾、保険代理業が仕事)。

そして熱ある教育を。又、

ボランティア連絡協議会の

長として三十一団体の調整

自然体の扶助心の大切さを

ボランティアの実体験、

塾、保険代理業が仕事)。

## 同窓生のお店



すっかり綺麗になつた恵比寿駅から徒歩二分の所にイタリア料理を中心とした南欧料理、箸で味わう気さくな雰囲気の店がある。それがキッチンパパスである。

恵比寿一丁目交差点を広尾方向に行つた四軒目のビルの地下一階に降りてゆくと、お洒落な作りのこじんまりとしたイタリア料理の店に入る。オーナーは渡部

雅樹(二十五期F組)さんで主に厨房で料理作りに専念している。この店の自慢は新鮮な魚貝類である。魚介類は毎日築地の市場から仕入れている。新鮮で旬の素材を提供している。特に魚介類のカルパッチョは絶品でオーナーお勧めである。

ワインは三十五種類常時用意してあり、今話題の新世界ワインもある。もちろんO.B.が多い。

駒大高のO.B.にはオーナーより特別サービスがあるので申し出て下さい。

電話

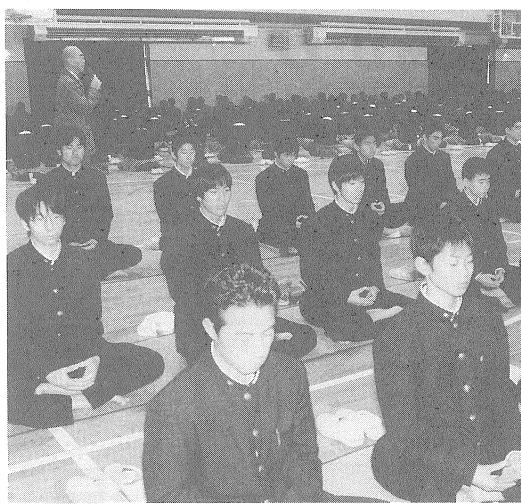
○三一三四四〇一四七四

九 滋谷区恵比寿一丁目

二 追分ビル地下一階

午前十一時三十分～午後十時三十分

定休日 日曜日



本校の建学の精神の根幹をなす禅の教えを実践する学校行事の一つに「臘八撰心」—早朝参禪会—があります。今年度も十二月一日から六日間、体育館において、朝七時半より八時十分まで行われました。今回の皆勤者は、三百八十名を数え、三年間皆勤者は三十一名となりました。

## 臘八攝心

教諭 鈴木純行

## 再会の時 四十七期B組

## 剣道部OB会 教諭 井上誠二

井上誠二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二



